

■ 本文

- ① 人はいさ心も知らずふるさとは花ぞ昔の香ににほひける（『古今和歌集』）
- ② これやこの行くも帰るも別れては知るも知らぬも逢坂の関（『後撰和歌集』）
- ③ 秋来ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる（『古今和歌集』）
- ④ 駿河なる宇津の山辺のうつつにも夢にも人にあはぬなりけり（『伊勢物語』）
- ⑤ 都へと思ふをものの悲しきは帰らぬ人のあればなりけり（『土佐日記』）
- ⑥ 京にはあらじ、あづまの方に住むべき国求めにとてゆきけり。（『伊勢物語』）
- ⑦ 神へ参るこそ本意なれと思ひて、山までは見ず。（『徒然草』）
- ⑧ 仁和寺にある法師、年寄るまで石清水を拝まざりければ、心うく覚えて、ある時思ひ立ちて、ただ一人、徒歩より詣でけり。（『徒然草』）
- ⑨ ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず。（『方丈記』）
- ⑩ 祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり。おごれる人も久しからず、ただ春の夜の夢のごとし。（『平家物語』）
- ⑪ 親のあはすれども、聞かでなむありける。（『伊勢物語』）
- ⑫ よどみに浮かぶうたかたは、かつ消えかつ結びて、久しくとどまりたるためしなし。（『方丈記』）
- ⑬ 逢ひ見ての後の心にくらぶれば昔は物を思はざりけり（『拾遺和歌集』）
- ⑭ めぐり逢ひて見しやそれともわかぬ間に雲がくれにし夜半の月かな（『新古今和歌集』）

■ 設問（全22問）

1. 例文①「人はいさ心も知らず」の傍線部「心も知らず」を現代語訳せよ。
2. 例文③の傍線部「見えねども」の「ね」の活用形を答えよ。
3. 例文③には「ぬ」と「ね」が一つずつ含まれる。「秋来ぬ」の「ぬ」と「見えねども」の「ね」は、それぞれ打消「ず」か完了「ぬ」か。判別し、理由を「直前の語が未然形か連用形か」という観点から説明せよ。
4. 例文④の傍線部「あはぬなりけり」の「ぬ」は打消「ず」である。その活用形を答えよ。また、なぜ完了の「ぬ」ではないと言えるか、直前の語に着目して説明せよ。
直前の「あは」は何形か。
5. 例文④「うつつにも夢にも人にあはぬなりけり」を現代語訳せよ。
6. 例文⑤の傍線部「帰らぬ人」の「ぬ」は打消「ず」である。その活用形を答えよ。
7. 例文⑥の傍線部「あらじ」の「じ」は「ず」とは別の助動詞である。「じ」の意味を二つ答え、「ず」との意味の違いを一言で説明せよ。
8. 例文⑦「山までは見ず」を現代語訳せよ。
9. 例文⑧の傍線部「拝まざりければ」の「ざり」の活用形を答えよ。
その「ざり」のすぐ下にある「けれ」は、どの助動詞の何形か。
10. 例文⑧「年寄るまで石清水を拝まざりければ」を現代語訳せよ。

11. 例文⑨の傍線部「もとの水にあらず」の「ず」の活用形を答えよ。
12. 例文⑨の傍線部「絶えずして」の「ず」の活用形を答えよ。
13. 例文⑩「おごれる人も久しからず」について、(1)「ず」の活用形を答え、(2)全体を現代語訳せよ。
14. 「ず」は活用語のどの活用形に接続するか。文法用語で答えよ。例文①②③④⑤のうちから、その接続を確かめられる例を一つ挙げて示せ。
15. 次の傍線部「ぬ」「ね」のうち、打消の助動詞「ず」(の連体形「ぬ」・已然形「ね」)であるものをすべて選べ。
 - (ア) 花も咲かぬ里
 - (イ) 花は散りぬ
 - (ウ) いまだ知らぬ人
 - (エ) 早く起きね (=起きてしまえ)
 - (オ) 風吹かねば波立たず
16. 前問の(ア)～(オ)について、打消「ず」と完了「ぬ」とを見分けた根拠を、「直前の語が未然形か連用形か」という観点からそれぞれ説明せよ。
17. 「咲かぬ」と「散りぬ」では、同じ「ぬ」でも意味がまったく異なる。それぞれを現代語訳せよ。
18. 「行かね(ば)」と「行きね」では、「ね」の意味が異なる。それぞれを現代語訳せよ。
19. 「ず」のザリ系列(ぎら・ぎり・○・ぎる・ぎれ・ざれ)は、どのようにしてできた形か。成り立ちを説明せよ。

もとになった二語は何か。

その活用は、どの動詞(活用の種類)と同じになるか。
20. 「ず」の本系列の終止形・連体形・已然形をそれぞれ答えよ。

終止形

連体形

已然形
21. 連体形「ぬ」が文中に出てきたとき、それが打消「ず」か完了「ぬ」かを瞬時に見分けるための「直前の語」の手がかりを、一文で説明せよ。
22. 已然形「ね」が「～ねば」の形で出てきたとき、それは打消「ず」の已然形である。その理由を、完了「ぬ」の命令形「ね」との違いに触れて説明せよ。

「～ねば」と「～ね。」では何が違うか。